

第41回 一年の言葉「災」か。

IT生

今年一年、地震、豪雨、台風による風水害…を象徴して一年を象徴する言葉は「災」だという。災（わざわい）とは、「もたらされるもの」と人はいうが、果たしてそうなのか。

いかなる自然現象が起きようとも、そこに人が住んでいなければ、人間社会に影響は及ぼさない。住宅の后背地の山が崩れては「逃げようがなかった」というが、そこに住宅が無ければ、犠牲者はでない。地盤の弱いところは、古来分かっている場所が多い。

テレビドラマで有名な、北海道の「富良野」は、アイヌ語で「臭くにおう泥土」という意味だ。火山の噴出物である泥炭が積もってできた場所だ。西日本豪雨の被災地となった、岡山・倉敷、愛媛・大洲では、被災地となった場所は繰り返し水害にあっている。



高知県の小さな山間集落では、地域住民が中心となって東大、京大の防災研究者とともに避難マップを作成している

これらの両被災地では、大きく被災した場所もあったが、それらの隣接地では、同じように被災しても、被害者がゼロだった対照的な場所があった。犠牲者がゼロだった場所では、歴史によく学び、事前の備えをしていたために、家屋は犠牲者のでた隣接地と同様、浸水したが、住民は全員、逃げ延びた。

一年を象徴する言葉を選ぶなら、むしろ、犠牲者がゼロだった事実をとらまえるべきではないか。であれば、「生」とでもなるだろうか。「災」の字を選び、それを、「(人間自ら)招くもの」ではなくて、「もたらされるもの」と考える限りは、教訓とはならないだろう。

年明けから、天皇の譲位、2年連続の国際スポーツの祭典、国内政治と国際環境の山場を迎える。一方で、さらなる地震、毎年のような豪雨災害は再来するだろうといわれている。

これからの2年をどうやり過ごすのか。日本の未来がかかっているといっても過言ではないだろう。だからこそ、当会が選ぶ今年一年の言葉は、「生」としたいところだ。

(平成30年12月)